

明清時代の中国における鯨資源の利用

謝 靖
下園 知弥
宮崎 克則

はじめに

鯨は世界における最大の生き物であり、食用や照明用の燃料、蠟燭原料、機械の潤滑油などとして使われ、捕鯨はそれぞれの地域の重要な産業であった。自然資源への意識が高まっている現在では、「反捕鯨」や「クジラ保護」がホットな話題として国際社会の注目を集めているが、かつて日本とアメリカは盛んに捕鯨を行っていた。

日本における鯨の利用(食用・鯨骨製品)は、縄文時代からあったとされ、日本列島の各地でその痕跡が発掘されている。ただし古代から中世にかけては、死んで浜に打ち上げられた鯨や、座礁や湾内に迷い込んだ鯨を捕獲したり、小型の鯨を弓矢や網、鉞などを使って狩猟していたと考えられている。16世紀から17世紀初め頃、捕鯨専門集団による組織的な捕鯨が、三河・尾張から紀州地域に始まり、土佐や北部九州へと伝播し、各地の基幹産業として展開した。日本における沿岸捕鯨は19世紀に最盛期を迎えたが、鯨の回遊の減少ために不漁が続き衰退していった。鯨は食用として利用されている他、鯨から採取された鯨油は灯火用の燃料や水田の害虫駆除用などとして全国に流通し、鯨髭もさまざまな工芸品の材料として使用されており、「捨てる部分なし」と言われたほどであった。

一方、アメリカにおける捕鯨は、17世紀にイギリスを中心とする入植者たちによって、鯨油の採取を主たる目的として行われた。彼らは当初、アメリカの東海岸で捕鯨を始めたが、資源の枯渇や新たな資源の追求のために、18世紀初頭から大型の帆船を本

船として捕えた鯨を解体し、船上に大釜を設置して採油する遠洋捕鯨を行うようになり、太平洋へも進出してくる。こうして19世紀前半にアメリカ捕鯨は最盛期を迎えることになるが、1859年にペンシルベニアで石油が発見されて以降、鯨油の価値は著しく低下し、急速に衰退していった。

17世紀から19世紀、日本とアメリカにおいて捕鯨業が栄えていた時期、中国において、捕鯨はどのように行われていたのか、鯨をどのように利用したのか、また鯨をどのように認識していたのか。これらの疑問に対する回答は、先行研究においてほとんど残されていない。ただし、明清時代に南シナ海の沿岸地域における捕鯨活動や鯨資源の利用についての記録はいくらかあるので、その記録を紹介することによって、中国における捕鯨について明らかにしたい。

1 日本の記録に見る中国の鯨認識

日本においては、捕鯨業が盛んになるにつれ、18世紀頃から捕鯨に関する絵巻が相継いで描かれるようになった。これらの絵巻には、当時の日本人が鯨の習性を利用してどのように捕鯨をしていたか、捕獲した鯨をどのように利用したかが絵画として描かれている。また、人見必大によって著された江戸時代の本草書『本朝食鑑』¹⁾には、「愚案ずるに、華人いにしえより今にいたるまで、これはを採らず、これを食わず、華人つねに魚の湿熱をいといて、みだりに大魚をくわらず。江海の利をむさばりて、これを採りて貨することをしらざるは、危きをなさざるか」

とある。このことから、日本では17世紀以前から中国側の鯨への認知度に関心を持っており、中国人は捕鯨を行わず、また鯨肉を食用に利用していなかったと認識していたことが分かる。日本における最も古い鯨の専門書とされる『西海鯨鮓記』²にも中国における鯨に関する記事がある。それには「鯨大者長数里、(中略)鯨頭骨如数百斛、一孔大如甕、述異記南海有明珠、即鯨魚目瞳可以鑒、俗謂夜光」とあり、中国では鯨を大袈裟に表現し、神格化していたとされていることから、当時の日本では、中国人は鯨の実物を見る機会があまりなかったと考えられていることが分かる³。とはいえ、日本の記録に見える中国人の鯨への認識は、明朝以前のことだと考えられる。その理由は、明朝から清朝にかけて、鯨の利用や鯨の捕獲に関する記録が多少ながら残っているからである。

古代の中国では、鯨は海中生物の中で最も神秘的



図1「中国沿岸部の地図」

な魚であった。躰が大きく、種類も多く、さまざまな呼び方があった。例えば、『然犀志』⁴においては、鯨を「海鱈」と呼び、海の中で最大の魚なので鱈と名付ける、と記されている。鱈は酋と同じ発音で、中国語で「首長」という意味である。また、広東省の徐聞県当地では鯨のことを「海龍公」と呼ぶ⁵。鯨を海王と見なし、鯨への敬意を表していた。さらに『海錯百一録』⁶では、「鯨は海魚の中で一番大きく、捕獲しにくいものである。時々、漁網で黒い児鯨が捕ることができ、漁網の中で必死にもがく」と指摘されている。

2 渤海・東シナ海地域における鯨の認識

中国には、渤海・黄海・東シナ海・南シナ海の4大海域がある(図1)。渤海と黄海は、狭い海峡によって外洋と繋がっている内海に占められ、海域の面積

はさほど大きくない。また、ともに古代の「中原文化」⁷に影響を与えたため、社会的要素と人文的要素の観点から見ても、両海域の文化は類似しており、主に牧畜・植物栽培を中心に伝統的な農業が発達している地域である。記録によると、渤海・東シナ海域の鯨に関する記録はほぼ座礁した鯨に関するものであり、捕鯨についての記載はない。これらの地域では、鯨はよく餌とする魚群を追うことから、鯨が泳ぐルートに従えば、多くの漁獲がもたらされた。従って、鯨はしばしば漁師たちから魚の神様だと考えられていた。漁師は海に出て魚を捕る際に、鯨の群が海を通るのを見かけた場合、すべての船が道を空け、依代⁸を焼きながら、彼らへの捧げ物として海に米を流した。そうして、鯨の群が離れた後、再び漁業の仕事へと

戻っていった。要するに、この海域の人々は、鯨の現れと収穫の吉兆とを繋げ、往々にして魚の神様の保護を求めていたのである。ちなみに、ベトナム中南部の港町ニャチャンには鯨の廟があり、鯨を海神として祭ってある。毎年、旧暦の8月10日に鯨の祭礼を行い、鯨に祈りを捧げるとともに、お供え物を作って祝う。ここでは鯨は「南海の主」として崇拜されているのである⁹。このことは、渤海や東シナ海地域とも共通し、これらの地域では鯨が信仰の対象とされていたと考えられる。

3 明清時代における南シナ海での捕鯨活動

南シナ海は、中国の南に位置するためにこのような名で呼ばれており、西太平洋の一部である(図2)。南シナ海は中国で最大の外海であり、渤海、黄海、東シナ海の総面積の3倍、南太平洋の珊瑚海とインド洋のアラビア海に次ぐ世界第3位の海域である。緯度0度から北緯23度付近まで幅広く広がっている熱帯・亜熱帯の海域であり、海洋資源は豊富である。

渤海や東シナ海地域と異なり、南シナ海では鯨についての認知度が高く、漁業も比較的発達していたため、捕鯨に関する記録は広東地区、広西地区、海南地区の地方誌にいずれも残されている。なかでも、広東地区は鯨の数が最も多く、捕鯨活動も盛んであった。明末の17世紀、屈大均は『広東新語』¹⁰の中で「長縄を銛につけ、投げて鯨を採る、また獲得した脂皮で万金をもらう」と記している。つまり、広東沿岸では銛で鯨を捕獲する捕鯨活動は既に行われていたのである。また、明朝の嘉靖期(1522～1566年)、顧山介は『海槎余録』のなかで次のように記している。

梧川山界有海湾，上下五百里，横截海面，且极其深。当二月之交，海鰾来此生育，俟风日晴暖，则有小海鰾浮水面，眼未启，身赤色，随波荡漾而来。土人用舢舨装载藤丝索为臂，大者每三人守一茎，其杪分赘逆须枪头二三支于其上。溯流而往，遇则并举枪中其身，纵索任其去向，稍定时，复似前法施射一二次毕，则棹船并岸，创置沙滩，徐徐收索。此物初生，眼合无所见，



図2「南シナ海の沿岸部(部分図)」

した「網掛突取法」が考案されて捕獲率が上昇するが、中国では網の利用はなかったようである。

『雷州府誌』のほか、『高州府誌』¹³『吳川県誌』¹⁴などの記録にもほぼ同様の記述がある。これらの地域は地理的にも近くであるから、鯨に関する各地区の動きは類似していたと考えられる。清朝における南シナ海の捕鯨は雷州府に集中し、雷州府は南シナ海のなかでもっとも捕鯨が盛んな地域であった。例えば、雷州府にある徐聞県の地方志¹⁵によると、

清嘉庆年间，新寮六湾村民陈万明、梁其寿等人组织30吨级的帆船10艘，共计100人的捕鲸队进行捕鲸。清末民初，外罗、新寮、公港等地普遍做海公船，进行季节性捕鲸，极盛时有船一百多艘

とあり、清朝の嘉慶期(1796～1820年)、新寮六湾の陳万明、楊其寿という名の漁民たちは30トン規模の帆船10艘を備え、100人を組織し、捕鯨活動を行っていた。そして、清末民国初期、外羅・新寮・公港などの村で「海公船」と呼ばれる専門的な捕鯨船を作り、鯨が沿岸に寄ってくる季節ごとに捕鯨を行い、盛んな時の船数は100に達していた(図3)。

さらに、広東だけではなく、広西・海南の沿岸側の地方誌にも捕鯨に関する記録が残されているが¹⁶、捕鯨の記載は簡素である。広東地方に比べて広西の海域面積は狭かったので、あまり捕鯨活動は盛んではなかったと考えられる。

4、鯨資源の利用

鯨資源をいつから利用し始めたのかは記録には明確に記されていないが、これまであげた記録から、少なくとも明朝の嘉靖期(1521～1567年)に鯨を捕っていた時には既に鯨を利用していたと推測できる。また、渤海と東シナ海では捕鯨は行われていないものの、流れ鯨や寄せ鯨を利用する場合があります、鯨の利用方法を把握していたことが分かっている。ここでは、明清時代における鯨の利用を全体的に見

ていきたい。

前掲の『雷州府誌』にあった、鯨肉を10艘の船に乗せ、値「百万」とあるという箇所と、『海槎余録』にあった、家族みんなでその肉を分け合い、それで油を取るの絶好のことであるという箇所から、明清時代の中国人は鯨の利用方法を知っており、商品として販売していたのではないかと推測できる。『丹徒县誌』¹⁷には、「其脂能逆风延织。明万历年，兵部檄，取以为火攻，具而黠甚」¹⁸との記述があり、日本語に訳すと「鯨油を燃やすと非常に激しく燃え、逆風になっても不滅であり、戦争の際、鯨油を用いて焼き討ちとして使う効果がとてもよい。戦争の燃料にも使える」となる。そして『本草綱目』の「イルカ¹⁹の油を石灰と混ぜれば、船補修に絶好の材料となる」という記述からは、日本やアメリカでは見られない利用法が窺える。また康熙33年(1694)『登州府誌』には「其肉可以煎膏熬油，其骨可以作桥梁屋栋」とあり、咸豊8年(1858)『文昌县誌』には「肉食之，稀痘蒸油点灯避邪，脊骨可为舂臼」とある。鯨肉を食用とし、鯨の皮脂から採られた油は照明の油として利用するほか、丈夫な骨は家や橋を建てる梁と器にも使用することができるという。しかし、残念ながら、鯨の利用の時期についての記載は史料に残っていないため、ここでは、いつから鯨を食べ始め、骨で屋根を建てられたのかを明確にすることはできない。

おわりに

明清期における中国では、渤海や東シナ海の漁民にとって鯨は漁獲の手がかりであり、豊漁の前兆とされ、「海の神様」のような存在であった。南シナ海地域は捕鯨の歴史を持ち、すでに鯨を捕っていたが、日本やアメリカのように捕鯨に携わる捕獲部門、解体部門、販売流通システムを備えた大規模な捕鯨業は形成されず、あくまでも局地的な捕鯨活動であった。また、捕鯨は副業として人々の生活を潤していたが、子供の鯨を狙う場合が多く、漁として未成熟な段階に留まっていたと考えられる。南シナ海にお

いては、雷州半島がもっとも長い捕鯨の歴史を持ち、1953年まで鯨を断続的に捕っていた²⁰。このように、海に恵まれた南シナ海の漁民たちは鯨資源を十分に

利用し、東アジアにおける捕鯨文化の一つとしてその文化を充実させていた。

注釈

- 1 人見必大『本朝食鑑』元禄10(1697)年(平凡社東洋文庫、1976年)
- 2 谷村友三 享保5(1720)年『西海鯨鯢記』(柴田恵司、『海史研究』第34号、1980年)
- 3 宋正海、郭永芳、陈瑞平『中国古代海洋学史』北京海洋出版社、1986年
- 4 上下2巻に分けて、乾隆44年(1779年)に完成された。作者の李調元は清朝の学者、詩人であり、広東地方へ見聞に行った時、実際に見た93種類の海洋物を記録したもの。古代中国における海洋生物の研究にとって最も参考価値のある史料とされている。
- 5 『徐聞県志』(清)王輔之等纂修成文出版社、1973年
- 6 清朝の海洋産物を記録する専門的な書籍。作者は郭柏蒼(1815～1890)、博物学者、詩人であり、清朝道光年間に中国沿岸の水産物を考察した上で記したもの。
- 7 中原の文化とは中原地方の物質的な文化と精神的な文化の総称である。最も早い時期は紀元前約6000年から紀元前約3000年の中国の新石器時代まで遡る。河南省を中心に、黄河下流地域を中心に、外に広がっていく文化とされる。
- 8 神仏に差し上げる紙で作った銭のこと。
- 9 秋道智彌「鯨を祈る」『『文明のクロスロード』季刊第17巻、博物館等建設推進九州会議、2005年
- 10 全書は28巻からなる。広東地方における地理、経済、民俗などが記録され、広東大百科と評判される。作者の屈大均(1630～1696)は明末清初の著名な学者、詩人であり、「驗之以身經，征之以目睹」を指摘し、自らの経験のもとに記録したものである。
- 11 顾山介『海槎余録』(執筆年代は明朝嘉靖)、本文は以下のサイトを参照した。百度文庫http://wenku.baidu.com/link?url=7lm3W3F3kqgZV63HLu8sbU10oY6lypaJYd29TpzjZv8mgrpJnilZmOfjC_9qR8FKHynicr8a-WH6d4j6SM_a8Gu5jKV4KTrgeBCNApqpXp6O (閲覧日：2013年8月29日)
- 12 『雷州府志』(清)吳盛藻、清康熙11(1672)年刻本
- 13 楊霽陳蘭彬『高州府志』清光緒16(1890)年刻本
- 14 毛昌善陳蘭彬『吳川縣志』清光緒23(1897)年刻本
- 15 徐聞縣志編纂委員會『徐聞縣志』廣東人民出版社2000年
- 16 沙大禹「鯨魚考」中国海洋大学、殷都学刊2012年3月
- 17 江苏省西南部に位置する鎮江市の地方誌である(旧名丹徒)。
- 18 陳万青『鯨与捕鯨』北京科学出版社、1978年
- 19 イルカは、クジラ類ハクジラ亜目に属する種の内、比較的小型の種の総称である。
- 20 前掲書『徐聞縣志』(2000年)